



Title	1940年代前半スイスにおける観光研究機関の成立 : 戦後の展開に関する予備的考察
Author(s)	森本, 慶太
Citation	パブリック・ヒストリー. 2024, 21, p. 42-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95495
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1940 年代前半スイスにおける観光研究機関の成立

戦後の展開に関する予備的考察

森本慶太

はじめに

1930 年代末から 40 年代初頭にかけてのスイスでは、「科学的観光論」（以下、観光論）と称する観光研究を振興する機運が高まった。その結果、高等教育機関に研究所や教育課程が整備され、観光論の諸問題に関わる研究書の刊行や研修会が開催された。本稿の目的は、このスイスで制度化された研究・教育機関の特徴を時代状況との関連で再検討することである。⁽¹⁾

近年の日本では、産業空洞化にともなう観光振興の活発化やインバウンドの急成長を背景に、観光は職業教育の対象としてだけでなく、研究の対象となり、大学への観光学部・学科・コースの設置が急速に増加し、観光学界の規模も拡大しつつある。そのなかで、戦前以来の日本の観光学史を検討した研究も次第に現れてきている。⁽²⁾

本稿の関心は、第一次世界大戦以降ヨーロッパで展開された観光研究の潮流と、現在の観光研究との間に生じた「断絶」にある。この断絶の存在については、すでに日本の観光研究者によって指摘されてきた。安村克己によれば、1920 年代からイタリアやドイツ語圏諸国で展開されてきた観光経済学や観光統計学の研究は現在の観光研究に継承されず、後者が生まれたのは、第二次世界大戦後のマス・ツーリズムが広範囲に与えた甚大な影響が認識されるようになった、1970 年代以降のことであるという。⁽³⁾ この背景に関しては、石森秀三による興味深い指摘がある。戦前からの観光学の理論的発展は、1950 年代から 60 年代にかけての世界的な観光開発ブームによって阻害された。具体的には、戦前のヨーロッパで生まれた、体系的で理論的

(1) 本稿の内容に関しては、拙稿「第二次世界大戦期スイスにおける「観光論」の形成——W・レプケとの関係性を手がかりに」『ゲシヒテ』第 11 号（2018 年 4 月）、31–40 頁、および拙著『スイス観光業の近現代——大衆化をめぐる葛藤』関西大学出版部、2023 年の第 6 章もあわせて参照されたい。これらの拙稿・拙著と本稿には一部重なる部分があるが、本稿では上記の研究で十分に検討できなかった、スイスの観光研究機関の設立過程と特徴に焦点を当てて論じる。

(2) 最近の研究として以下を挙げる。工藤泰子「我が国の観光教育機関についての史的研究——2 つの東京オリンピックと教育機関を中心に」『日本国際観光学会論文集』第 22 号（2015 年 3 月）、13–19 頁、同「戦前の我が国における観光学についての史的研究」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要』第 53 巻（2015 年）、65–76 頁、松山利夫「日本の観光学史——1930 年から現在まで」『平安女学院大学研究年報』第 17 号（2016 年）、1–8 頁。

(3) 安村克己『社会学で読み解く観光——新時代をつくる社会現象』学文社、2001 年、23–29 頁。

な学問としての伝統は、アメリカ合衆国を中心とする実用性を重視した観光学に取って代わられ、高い評価を得られなかったという⁽⁴⁾。

安村と石森の指摘をふまえると、1950年代から60年代にかけてのマス・ツーリズムの時代に断絶を引き起こした要因があるといえそうである。換言すれば、西側諸国の高度経済成長にともなう観光の規模の急拡大という時代状況が、かえって観光の総合的・理論的研究を妨げるようになった。そして、その急拡大が問題視されるにいたって、新たな観光研究が生まれてきたということである。

以上のように考えれば、戦間期以降のヨーロッパで観光研究が高まりをみせたという事実にも、当然歴史的文脈があるはずである。すなわち、世界恐慌や戦争という観光を取り巻く危機的状況への問題意識が高まり、状況に対応するための研究活動が要請されたのである。そして、第二次世界大戦後の「解決」（西欧諸国の経済復興とマス・ツーリズムの形成）は、戦間期の時代状況のなかで生まれた観光研究の存在意義をかえって失わせる結果になったのではないだろうか。こうした見通しを明確にするためには、時代状況との関連を意識して観光研究の系譜を検討する必要があるだろう。そこで本稿では、戦後のドイツ語圏の観光研究の変容を展望しつつ、1930年代末から40年代初頭にかけて制度化の途上にあったスイスの観光論の特徴について再検討を試みる。

スイスにおける観光論は、スイス観光連盟（以下、観光連盟）の事務局長であったW・フンツィカー（Walther Hunziker）と、彼の右腕として、観光連盟の科学統計部門に属したK・クラプフ（Kurt Krapf）⁽⁵⁾が中心となり、1930年代末から構想され、1940年代に研究機関が開設されて活動を本格化していく。観光論確立の過程で、かれらの共著として1942年に刊行された『観光論概説』⁽⁶⁾は、経済学を基礎としつつも人文・社会科学全般に通じる視野の広さをもって⁽⁷⁾いたと高く評価されている。

先述の安村と石森の指摘は、ドイツ語圏、とくにスイスの観光論に当てはまる。ドイツ語圏の観光研究の歴史を検討したH・シュポーデは、一連の研究で、スイスの観光論が歴史学や社会学をも視野に入れて総合的に観光を把握しようと試みた点を評価しつつも、戦後には視野の広さを放棄してしまい、観光現象を広く理解しようという方向性を失っていったと指摘して

(4) 石森秀三「国際観光学アカデミー——観光研究の最近の動向」『民博通信』第47号（1990年2月）、71頁。

(5) 前掲の拙稿・拙著では「クラブ」と表記していたが、本稿では「クラプフ」と改める。

(6) W. Hunziker/K. Krapf, *Grundriss der allgemeinen Fremdenverkehrslehre (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 1)*, Zürich 1942. 前掲拙稿・拙著では『一般観光論概説』と訳していたが、本稿では『観光論概説』に改める。

(7) シューマッハは、本書が観光研究にM・ウェーバー（Max Weber）やW・ゾンバルト（Werner Sombart）を志向した機能論にもとづく体系的アプローチを導入したと評価する。Beatrice Schumacher, *Ferien: Interpretationen und Popularisierung eines Bedürfnisses Schweiz 1890–1950*, Wien 2002, S. 348–351.

(8) いる。すなわち、観光研究者は、マーケティング、地域計画、経済計画、交通計画といった限られた問題しか取り組まなくなり、さらにはホテル経営をはじめとする「技術学」に収斂していくことになるのである。こうしたスイスおよびドイツ語圏の観光学史に焦点を当てた邦語研究は複数存在するが、観光論の制度化の過程を時代状況との関わりで検討しているわけではない。⁽⁹⁾

戦後の観光論とその時代背景の検討に際して示唆的なのは、G・イルムシャーによる研究である。この研究は、戦前のドイツで観光論を確立したR・グリュックスマン（Robert Glücksmann）とその弟子であるA・グリュンタール（Adolf Grünthal）を対象に取り上げ、戦後にグリュックスマンの研究が忘却されていく状況について、かれらに取って代わったフンツィカーからスイスの観光研究者との関係に着目しつつ論じている。⁽¹⁰⁾しかし、観光研究の歴史から忘却されていくのは、グリュックスマンの系譜だけではなかった。スイスを含む戦後ドイツ語圏の観光研究自体が、現在の観光研究、そして歴史研究において、長らく顧みられることがなくなるのである。

本稿では、この断絶の背景を探るための準備作業として、戦時中のスイスで構想された観光研究の制度化の過程を検討したい。以下、第1章では、ドイツからスイスへ観光研究の拠点が移転する流れを概観する。第2章では、スイスの高等教育機関に研究組織が設置されるまでの展開についてフンツィカーとクラブフの活動を中心に検討する。第3章では、教育組織が整備された高等教育機関、ザンクト・ガレン商科大学観光セミナー（Seminar für Fremdenverkehr）⁽¹¹⁾に焦点を当て、戦時中の段階で、そこでの研究・教育活動がどのように構想されていたかを探る。

1 グリュックスマンからの「継承」

観光研究の歴史において、フンツィカーやクラブフによる研究活動は、ドイツのグリュック

(8) Hasso Spode, “Zur Geschichte der Tourismusgeschichte”, in: Wiebke Kolbe, Christian Noack, Hasso Spode (Hg.), *Tourismusgeschichte(n) (Voyage: Jahrbuch für Reise & Tourismusforschung*, Bd. 8), München/Wien 2009, S. 9–22; Id., “Tourism Research and Theory in German-Speaking Countries”, in: Graham M.S. Dann/Giuli Liebman Parrinello (eds.), *The Sociology of Tourism: European Origins and Developments*, Bingley 2009, pp. 65–93; Id., “Geburt einer Wissenschaft: zur Professionalisierung der Tourismusforschung”, in: Isabella Löhr/Matthias Middell/Hannes Siegrist (Hg.), *Kultur und Beruf in Europa*, Stuttgart 2012, S. 11–25.

(9) 塩田正志『観光学研究Ⅰ』学術選書（第5版）、1998年、大橋昭一「ドイツ語圏における観光概念の形成過程——ドイツ観光経営学研究のⅠ章」『大阪明浄大学紀要』第1号（2001年3月）、11–21頁、早崎正城「観光学における史的考察」『長崎国際大学論叢』第2巻（2002年3月）、111–118頁、富川久美子「ドイツ語圏における観光研究の展開と観光の概念規定」『総合観光研究』第1号（2002年11月）、107–116頁。

(10) Gerlinde Irmscher, “Auf die Fährte eines Spurensuchers: Adolf Grünthal, Robert Glücksmann und die Exilierung der deutschen Fremdenverkehrsforschung”, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 65. Jg., Heft 5 (2017), S. 453–470.

(11) 前掲の拙稿と拙著においては「観光講座」と訳してきたが、原語が Lehrstuhl ではなく Seminar であることと、大学外部の官民の関係者が運営に関与していた組織の性格も鑑み、本稿では「観光セミナー」と改めることにした。

スマンから継承されたものとして位置づけられることが多い。⁽¹²⁾ 改めて、グリュックスマンによる活動を振り返っておこう。

グリュックスマンは、1877年にオーバーシュレジエンのグロットカウで生まれた。彼はベルリン、ベルン、ボンの諸大学で学び、法学・国家学の博士号と商学士の学位を取得している。1914年からはデュッセルドルフで国際ホテル教育学院（Internationales Institut für das Hotelbildungswesen）の運営に携わった。この教育機関は、1919年にはホテル・交通関連大学（Hochschule für das Hotel- und Verkehrswesen）に改組され、グリュックスマンは私経済学担当教授となった。しかし、この大学は第一次世界大戦後の経済混乱のあおりを受けて、1922年に閉鎖された。その後、ホテル経営と教育の専門家として知られていたグリュックスマンは、ドイツやスイスのホテルで経済顧問として働き、スイスの著名なホテル経営者一族であるザイラー家とも親交を結んだ。その間に、彼の関心はホテルから観光現象へと拡大した。そして、1929年にはベルリン商科大学に観光研究所（Forschungsinstitut für den Fremdenverkehr）を設立し、⁽¹³⁾ 所長に就任した。

この研究所は図書館・文書館の機能を担い、活発な研究を展開した。さらに彼は、学問分野としての確立を目指して、季刊の学術誌として『観光論叢』（*Archiv für Fremdenverkehr*）を創刊し、400部を発行した。創刊号には社会学者のL・フォン・ヴィーゼ（Leopold von Wiese）が執筆している。のちにフンツィカーとクラブフは、『観光論概説』において、この研究所の組織と活動を先駆的で模範的なものであり、廃止されるまでの間に文献収集と研究・教育の両面で、包括的なプランを実行に移したとして高く評価している。教育面では、ベルリン商科大学の学生を主たる対象としつつも、より広範囲での活動も展開した。⁽¹⁴⁾

『観光論概説』では、この研究所が1934年（シュポードによれば1935年）⁽¹⁵⁾ に廃止されたことに言及しているが、その背景には立ち入っていない。先行研究によれば、研究所が世界恐慌の影響で資金不足に苦しんでいたことと、グリュックスマンの出自がユダヤ人であったことが背景にあり、1933年のヒトラー政権成立によって厳しい立場に追い込まれたという。⁽¹⁶⁾ この間も彼は研究を続け、スイスで代表作『観光事業概論』を刊行しているが、⁽¹⁷⁾ 病気にかかり継続

(12) 富川「ドイツ語圏における観光研究の展開」、III頁。

(13) Christoph Moß (Hg.), *Briefe der Düsseldorfer Familie Glücksmann: Schicksal einer christlich-jüdische Familie 1939–1945*, Düsseldorf 2000, S. 8–9.

(14) Hunziker/Krapf, *Grundriss der allgemeinen Fremdenverkehrslehre*, S. 27.

(15) Spode, “Tourism Research and Theory in German-Speaking Countries”, p. 69. なお、モスはグリュンタールの研究をもとにグリュックスマンが1933年に研究職のキャリアを終えたとしている。Moß (Hg.), *Briefe der Düsseldorfer Familie Glücksmann*, S. 8, Anm. 10, S. 10. グリュンタールは以下の論文でも研究所の活動期間を1933年までとしている。Adolf Grünthal, “Die Tätigkeit des Forschungsinstituts für den Fremdenverkehr in Berlin 1929–1933”, in: *Jahrbuch für Fremdenverkehr*, 10 (1962), S. 3–17.

(16) Spode, “Tourism Research and Theory in German-Speaking Countries”, p. 69.

(17) Robert Glücksmann, *Allgemeine Fremdenverkehrskunde*, Bern 1935（『観光事業概論』国際観光局、1940年）。本書の前書きで、グリュックスマンが出版支援に対する謝意を表明した7名の人物は、すべてスイス観光関連団体（スイスホテル信託会社、スイスホテル協会、スイス観光連盟、スイス観光事務所）の幹部たちであった。

を断念した。その後グリュックスマンは、1942年にテレージエンシュタットの強制収容所で死亡している。

第二次世界大戦後、グリュックスマンの業績は観光研究の歴史から長らく忘れ去られた。その要因として、上記のような研究所閉鎖をめぐる事情や、スイスのフンツィカーとクラブフが研究を始めた時期に没したため、ドイツ語圏の観光研究の創始者として認識されなかったことが指摘されている。⁽¹⁸⁾ただし、先述の通り、グリュックスマンの没年に出版された『観光論概説』では、彼の業績を取り上げており、この時点でフンツィカーとクラブフがグリュックスマンを先駆者として位置づけていたことは明らかである。おそらく、フンツィカーらの戦後の活動のなかで、グリュックスマンの存在は次第に忘れられていったのであろう。

この点に関して、イルムシャーは、グリュックスマンの弟子グリュンタールの戦後の活動に注目し、書簡等の一次史料を用いてグリュックスマンの「忘却」の背景を検討している。観光研究所の閉鎖にともない研究拠点を失ったグリュンタールは、1935年に南アフリカへ渡るが、研究の継続が困難になる。イルムシャーによると観光研究自体は当時すでに国際的な学問分野であったが、それをリードしていたのはドイツであり、イギリスやアメリカへの亡命は現実的でなかった。また、もうひとつの選択肢になりえたスイスは観光業が危機的状況にあり、新たな職を見出せる状況にはなかったという。スイスについては、フンツィカーとクラブフが研究活動を開始する直前であったことも関係しているであろう。終戦後の1950年代半ば以降、グリュンタールは活動を再開し、グリュックスマンによる観光研究の復権を試みたが、戦後の観光学界は経済問題に関心を集中していったため、グリュンタールに対して冷淡であり、グリュックスマンの系譜は観光学界と歴史学界のいずれにおいても長らく忘れられていたと指摘している。そして、その忘却に関与した当事者がスイスの観光学界の代表的人物であるフンツィカーであった⁽¹⁹⁾というのである。

これはドイツ語圏の観光研究の歴史を解明するうえで興味深い指摘だが、戦後におけるグリュックスマンの忘却の意味を考える際には、経済問題に傾斜していくとされる戦後のフンツィカーとクラブフの理論の変遷に加え、かれらの実践活動を検討する必要があるだろう。かれらは観光研究者である以前に観光業界の人間であり、業界団体や国際組織に所属して理論と実践を往還していたのである。現時点で戦後のかれらの活動については、さらなる研究がまたれるところである。本稿では、今後の研究に向けた出発点として、第二次世界大戦中にスイスで設立された二つの研究機関を手がかりに、1940年代前半の観光論の特徴について考察を試みたい。

(18) Alexandre Panosso Netto/Margret Jäger, “Robert Glücksmann (1877–1942): Founder of Berlin School of Tourism Research”, in: *Anatolia: An International Journal of Tourism and Hospitality Research*, Vol. 27, No. 4 (2016), p. 574.

(19) Irmscher, “Auf die Fährte eines Spurensuchers”, S. 453–470.

2 観光研究の制度化——ベルン大学法学部観光研究所の設立

まずは、スイスにおける科学的観光論を牽引したフンツィカーとクラブフの経歴と活動について概観しておきたい。

フンツィカーは 1899 年にスイス北部のアールガウ州モースレアウで生まれ、チューリヒ大学で経済学を学び、1922 年に第一次世界大戦中のスイス綿糸工業についての研究で学位を取得した。⁽²⁰⁾ 1936 年にスイス観光連盟事務局に入り、翌年から事務局長に就任している。彼は、世界恐慌以降の不況と第二次世界大戦を背景とする観光業の危機的状況において、観光業の構造転換の必要性を認識し、経済部門としての国際観光の振興にとどまらず、国内外における政治・社会問題と観光との関係に視野を広げた。その一環として、スイスの労働者層・中間層を対象とする余暇の貯蓄制度とパック・ツアー提供を目的とした、スイス旅行公庫協同組合 (Schweizer Reisekasse: Reka) の設立 (1939 年 6 月) に構想段階から主導的役割を担った。Reka 設立後は理事長に就任し、1974 年に亡くなるまで務めた。⁽²¹⁾

1907 年にスイス北東部の都市ザンクト・ガレンで生まれたクラブフは、ジュネーヴ大学、チューリヒ大学、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス (LSE) で経済学を学んだ。スイス連邦鉄道の借款政策に関する研究で、チューリヒ大学から博士号を取得している。1937 年にスイス観光連盟の事務局に入り、科学統計部門の責任者となった。その後、フンツィカーとともにスイスの科学的観光論の深化と制度化に尽力していくことになる。晩年のクラブフから指導を受けた T・アコグルによると、1940 年代のクラブフは、ウェーバーから大きな影響を受けて、観光と社会科学との間に機能的な相互関係を確立させようとしていた。また、観光研究をレジャー研究ではなく社会科学の一分野に位置づけたという。⁽²²⁾

スイス観光連盟で出会ったフンツィカーとクラブフは、観光論の制度化に向けて協力し、後述するように 1941 年からはザンクト・ガレン商科大学観光セミナーとベルン大学法学部観光研究所の運営をともに担った。

第二次世界大戦後、フンツィカーとクラブフはスイスにとどまらず、観光研究者の代表的存在として国際的に活躍する。1949 年にかれらは、国際観光専門家協会 (Association Internationale d'experts Scientifiques du Tourisme: Aiest) を設立した。これは世界初の観光研究者による国際組織であり、フンツィカーが会長に就任した。この組織は、すでに 1946 年にスイスで創刊されていた雑誌 *The Tourism Review* の刊行を引き継ぎ、英独仏の 3 カ国語で刊行した。⁽²³⁾ さらに、フンツィカーは Reka の経験を土台に、「ソーシャル・ツーリズム」を体系化し、1963 年には国際ソーシャル・ツーリズム事務局 (Bureau international du tourisme social: BITS) の初代会長に就

(20) Walter Hunziker, *Die schweizerische Baumwollindustrie 1914–1919*, Diss., Zürich 1923.

(21) Reka 設立の経緯と戦時中の活動については、拙著『スイス観光業の近現代』第 6 章を参照。

(22) Tunay Akoglu, “A Portrait of Kurt Krapf”, in: *Anatolia: An International Journal of Tourism and Hospitality Research*, Vol. 26, No. 3 (2015), p. 507.

(23) Spode, “Tourism Research and Theory in German-Speaking Countries”, p. 73.

任している。

フンツィカーが観光の社会的側面や観光経営に関心を向けたのに対し、クラブフは国際的な観光開発や観光政策に研究テーマを変えていった。彼は、国際的な実践活動にも精力的に取り組み、スイスや外国政府にとどまらず欧州経済協力機構（OECE）、国連、世界銀行などの国際機関の観光アドバイザーとしても活躍した。彼は、1963年9月4日にチューリヒからローマへ向かう出張の途上、飛行機事故で急死するが、出張の目的はローマでの第1回国連観光会議への出席であった。⁽²⁴⁾

スイスにおける観光研究機関の設置は、1937年に観光連盟初代会長F・エーレンシュペルガー（Fritz Ehrensperger）が提言したのち、観光連盟が主導するかたちで具体化していく。彼は、ホテル経営者、温泉管理者、旅行会社職員に対する研修の必要を説き、「最高の観光国」スイスで観光という現象の要因や影響に関する研究が、一部の例外（ベルン大学のホテル経営学講座など）を除いて行われていないことを指摘した。その際に、ベルリン商科大学観光研究所の存在を引き合いに出しつつ、観光に関する先行研究がドイツの事例に偏っており、観光関連の統計が収集されているにもかかわらず、スイスを対象にした分析がなされていないと述べている。⁽²⁵⁾

1937年度の観光連盟の事業報告書には、「観光研究センター Forschungsstelle für den Fremdenverkehr」の設置構想について記録されている。そこでは、観光の構造や景気の変化についてほとんどわかっておらず、観光による雇用創出や、国家財政、国際収支への影響も体系的に明らかにされていないという現状を認識している。そのうえで、観光業が好調な時代であれば、観光研究は純粋な学術的関心事にとどまっていたかもしれないが、旅券や課税、価格や為替措置などへの国家による介入によって、旅行者の流れが転換させられている状況では、観光業界の指導的立場にある人間が、こうした変化についての知識をもつ必要があるとして、それを提供する組織としてのセンターが構想されていた。⁽²⁶⁾

当初この研究センターは、連邦工科大学チューリヒ校に設置することが検討されていた。具体的には、観光講座を設置して、観光分野全体を担当する教授職をおき、個々の分野については、観光実務に携わる専門家が担当するという構想であった。1937年11月30日、観光連盟は連邦工科大学に対し、同校への講座の設置を願い出た。しかし、翌年の3月12日にスイス教育庁は、大学が観光の科学的基盤を整備することを支援すべきであるとしたものの、教育的側面と研究活動をより明確に分離するよう提案した。観光連盟側の構想では、観光講座の受講生として、連邦工科大学の学生に加え、観光関連業界で働く人びとの聴講を想定していたが、後者に対しては、観光連盟の運営による短期間の研修の開催を提案した。研究面については、連邦

(24) クラブフの経歴については以下を参照。Schweizerischen Fremdenverkehrsverband (Hg.), *Im Memoriam Prof. Dr. Kurt Krapf*, Bern 1963; Akoglu, “A Portrait of Kurt Krapf”, pp. 506–509.

(25) Fritz Ehrensperger, “Probleme und Aufgaben der schweizerischen Fremdenverkehrspolitik”, in: *Sonderabdruck aus der Festgabe für Ernst Scherz, Direktor der Kantonalbank von Bern, zum 60. Geburtstag*, Zürich 1937, S. 8.

(26) Schweizerischer Fremdenverkehrsverband, *Tätigkeitsbericht über das Jahr 1937/38*, Zürich 1938, S. 75.

工科大学が既存の経済研究所と提携した観光研究所を設立することを提起し、観光連盟の費用負担のもとで設立を支援する用意を示した。この回答をふまえて、観光連盟は再検討を行ない、観光実務家に対する研修の機会の設定を優先することになった。その一方で、観光講座の設置という当初の構想が却下されたことで、州立大学を基盤とする観光講座の設置構想が生まれてくることになる。⁽²⁷⁾

1938 年以降、連邦工科大学に代わる研究拠点として、州立大学（ベルン大学）への観光研究所設置が具体化し、準備作業が進められた。すでに、ポーランド（クラクフ）やドイツ（フランクフルト）には観光研究所が設置されており、観光連盟はスイスへの研究機関の設置を急いでいた。観光連盟のなかで中心となって準備を進めたのは、ベルン大学名誉教授でベルン・レッチェベルク・シンプロン鉄道取締役、観光連盟理事でもあった、F・フォルマル（Friedrich Volmar）⁽²⁸⁾であった。その結果、ベルン大学法学部商業・交通・経営学科に併設するかたちで観光研究所を設置することになった。この研究所は、高等教育機関としてベルン大学の学生・聴講生のほかに観光の実務家の聴講も想定されており、公的資金に加え、観光連盟をはじめ協力関係にある団体からの寄付金で賄う財団として運営することになっていた。⁽²⁹⁾研究所は 1941 年 9 月に設立され、同大学助教授（経営学）の A・ヴァルター（Alfred Walther）⁽³⁰⁾が所長に就任したが、1943 年 10 月からはクラブフが引き継いだことにより、観光連盟がより積極的に運営に関与することになった。⁽³¹⁾戦時中の段階で、クラブフのもとで観光をテーマとするゼミ論文や学位論文が提出されている。また、1945 年度にはベルン大学法学部の懸賞論文の課題として「スイスのホテル業界における立地の問題」が指定され、大学内でも観光研究が認知されていっただけでなく、⁽³²⁾ベルン州政府からは様々な調査が依頼されるようになった。⁽³³⁾

ベルン大学法学部の観光研究所が研究に重点をおいたのに対して、ザンクト・ガレン商科大学では、人材育成を目的とする教育活動を中心に展開した。この点については章を改めて論じ

(27) Ebd., S. 75–76.

(28) フォルマルの経歴については以下を参照。H. R. Meyer, “Zur Erinnerung an Prof. Friedrich Volmar, 1875–1945”, in: *Die Schweiz=Suisse=Swizzera=Switzerland: offizielle Reisezeitschrift der Schweiz. Verkehrszentrale*, Heft 2 (1945), S. 75; Christoph Zürcher, “Volmar, Friedrich”, in: *Die Stiftung Historisches Lexikon der Schweiz* (Hg.), *Historisches Lexikon der Schweiz*, Bd. 13, Basel 2014, S. 66.

(29) Schweizerischer Fremdenverkehrsverband, *Tätigkeitsbericht über das Jahr 1938/39*, Zürich 1939, S. 63.

(30) ヴァルターの経歴については以下を参照。Max Boemle, “Walther, Alfred”, in: *Die Stiftung Historisches Lexikon der Schweiz* (Hg.), *Historisches Lexikon der Schweiz*, Bd. 13, Basel 2014, S. 244.

(31) *Referate an der Generalversammlung des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes vom 30. Oktober 1943 in Neuenburg und Tätigkeitsbericht 1942/43 des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes* (Publikationen des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes: 19), Bern 1944, S. 98. 戦後の活動については、富川「ドイツ語圏における観光研究の展開と観光の概念規定」、III 頁を参照。

(32) *Referate an der Generalversammlung des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes vom 9. Februar 1945 in Davos und Tätigkeitsbericht 1943/44 des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes* (Publikationen des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes: 20), Bern 1945, S. 71–72.

(33) *Zwischen Krieg und Frieden: Referate an der Generalversammlung des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes vom 15. Dezember 1945 im Kongresshaus in Zürich und Tätigkeitsbericht 1945 des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes* (Publikationen des Schweizerischen Fremdenverkehrsverbandes: 21), Zürich 1946, S. 73

たい。

3 ザンクト・ガレン商科大学観光セミナーの活動

ザンクト・ガレン商科大学は、ザンクト・ガレン州政府によって 1898 年に設立された「ザンクト・ガレン商業アカデミー」を前身としており、1911 年に商科大学へ改組された。W・フーク (Walther Hug) 学長の時代 (1926–44 年) には改革運動が推進され、1938 年には学位審査権を獲得し、スイスの他の総合大学や連邦工科大学と同格の地位を認められるにいたった。⁽³⁴⁾ ザンクト・ガレン商科大学における観光セミナーの開設は、ベルン大学観光研究所と同時期の 1941 年 9 月 16 日のことであり、1941/42 年冬学期から新たな学習・学位のコースがスタートした。本章ではこの観光セミナーに焦点を当て、戦時中の活動について検討する。

この観光セミナーの運営を講師として担ったのは、観光連盟のフンツィカーであった。彼はセミナーの運営と同時に、商科大学が導入した全学生の必修科目「観光論 *Fremdenverkehrslehre*」の講義も担当した。セミナー設立当初は、クラブも運営に関わってフンツィカーを支えたが、ベルン大学観光研究所の運営に専念するために辞任している。⁽³⁵⁾ これにより、完全な分離とまではいえないが、研究に重点をおくベルンの研究所と、人材育成を重視するザンクト・ガレンの観光セミナーとの間に、一定の役割分担が成立することになった。⁽³⁶⁾

以下、クラブの論文「観光教育の場としてのザンクト・ガレン商科大学」(1943 年)をもとに、観光セミナーの活動と特徴を考えてみたい。⁽³⁷⁾

観光セミナーにおける教育方針は、「科学的知識と科学的方法に基づいて、実生活上の諸問題に対処できる経済実務家を育成する」というザンクト・ガレン商科大学の目標にしたがって、職業訓練とは一線を画しつつも、総合大学で展開されている理論的研究ではなく、実践的で応用的な現実科学を習得させ、観光業界の第一線で活躍できる人材の育成にあった。クラブは、観光に関わる職業が文化などさまざまな知識を求められることを認めながら、教育内容は経済志向が強いものになっていると述べる。⁽³⁸⁾

この「経済至上主義」について、クラブは戦間期以来のスイス観光業を取り巻く状況を挙げて正当化する。例えば、移動の自由が失われて、観光客が自由に国境を越えられなくなった。また、観光業の国際競争が激しくなるにつれて、労働環境や収入の状況も大きく変化している。

(34) 商業アカデミーの創設から商科大学への改組に関しては、早島瑛「ザンクトガレン商業アカデミーの創設と展開」『商学論究』(関西学院大学) 第 43 巻 (1996 年)、637–660 頁を参照。

(35) Theo Keller, “Professor Hunziker und das Seminar für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St.Gallen”, in: *Fremdenverkehr in Theorie und Praxis: Festschrift für Walter Hunziker*, Bern 1959, S. 78–82.

(36) Ebd., S. 80.

(37) Kurt Krapf, “Die Handels-Hochschule St. Gallen als Ausbildungsstätte des Fremdenverkehrs: Studiengang und Studienziele”, in: *Kurort, Kurdirektor, Verkehrsdirektor: Ein Beitrag zur Institutionenlehre des Fremdenverkehrs und zur Abklärung von Wesen und Funktionen des Fremdenverkehrsortes sowie der Stellung, Aufgaben und Ausbildung seiner Organe* (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 3), St. Gallen 1943, S. 75–88.

(38) Ebd., S. 75–76.

スイスがこれまで享受してきた観光業での独占的地位は失われて、事業者や団体に深刻な調整を要する課題が突き付けられているというのである。経済の全般的傾向としても、経験的で伝統的な経営が、純粋に経済的な目標に基づく経営に道を譲らざるを得なくなっており、その影響がおよぶなかで観光業においては管理業務が個人から国家や組織へと移りつつある。このように合理的で「科学的」な経営管理の必要性和、観光業が一般的な経済政策や国家の政策と相互に依存していることが、人材育成において経済が優先されることを正当化する、とクラブフ⁽³⁹⁾はいう。

以上の問題意識から、観光セミナーでは、専門学校とは異なり、最初から観光に教授範囲を限定せず、経済や行政の相互関係についての洞察を提供することを目的とする。それゆえ、経営学概論、理論経済学、経済地理学、金融数学、統計学といった、経済学と経営学に関する学習が前提として重視された。あわせて、言語の科目（フランス語・英語・イタリア語・スペイン語・ロシア語・外国人向けドイツ語）も設定され、文化的知識を豊かにすることもめざされていた。⁽⁴⁰⁾観光の専門教育は、以上を土台として第3学期から始まり、観光論、観光経営概論、運輸業経営特論、宿泊業経営特論、観光宣伝特論の諸分野を学ぶ。6学期の最後には学位プログラムを締めくくる試験が行われ、合格者には経済学の修士号（Lizentiat）が授与される。この試験を受ける前提として、半年から一年間の観光業界での実務経験が求められる。さらに少なくとも2学期研究を継続することで、博士号取得の試験を受けることができるが、その内容は観光だけでなく経済学の全分野を含むものとされた。⁽⁴¹⁾

当時は戦争中であり、観光業は停滞していたが、クラブフはそのような状況下で観光セミナーを設立した理由について、この不活発な期間を、有能で知識豊富な経営者を育成する準備期間と捉えるべきであると主張し、戦後の観光の再生を展望して、戦後の発展は人的要因とその質によって決まってくるという。その意味で、観光セミナーの設立は時宜を得たものとされた。⁽⁴²⁾

ザンクト・ガレン商科大学観光セミナーは、先述のように教育による人材育成に重点をおいていたが、研修のための研究活動も行われた。また、フンツィカーやクラブフに加え、外部講師を招いた講演会の記録や研究論文を収録した図書シリーズ（Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen）が刊行されている。この第一冊として1942年に刊行されたのが、先述のフンツィカーとクラブフの共著『観光論概説』である。⁽⁴³⁾本書の特徴は、戦前の観光研究が主に外国人観光客の誘致を想定して、統計や観光宣伝に重点をおいていたこととは対照的に、その範囲が経済にとどまらないことである。具体的には、国内向けの観光政策、社会事業、政治、文化といった幅広い事象と観光との関係に章を割いており、政治・

(39) Ebd., S. 76–77.

(40) Ebd., S. 78–79.

(41) Ebd., S. 80–81.

(42) Ebd., S. 84–85.

(43) Hunziker/Krapf, *Allgemeine Fremdenverkehrslehre*.

経済への国家介入の強化に代表される同時代の国内外の情勢を反映した記述がなされていた。

『観光論概説』刊行以降、観光セミナーはこのシリーズを、セミナーが開催した研修会の記録を中心に 1945 年までに合計 7 冊刊行している。⁽⁴⁴⁾そこで扱われているテーマには、「戦時経済における交通と観光」「保養地、保養地管理者、交通管理者」「戦後の交通と観光に関する諸問題」「科学的観光論の体系と主要な諸問題」「保養と労働力」などが挙げられ、主に戦時中の観光を取り巻く状況と戦後の観光のあり方を見据えたものとなっている。観光セミナーの教育内容を反映して、基本的には経済的観点からの研究が多いが、「保養と労働力」のように、労働者層や中間層の観光への参加を扱ったものもある。この点に関して、クラブフは、1933 年以降のドイツでの展開と戦争にともなう社会変化に目を向ける必要性を指摘している。⁽⁴⁵⁾さらに、スイスに滞在していたドイツ人エコノミスト、W・レプケ（Wilhelm Röpke）の著作『現代の社会危機』を引き合いに出し、観光の危機を説明する際には、経済的議論だけでは不十分で、外交の状況や社会的変化の過程を参照する必要があると論じている。⁽⁴⁶⁾

おわりに

本稿では、第二次世界大戦後のスイス観光論の変容を検討する前提として、1930 年代末から 40 年代前半にかけての観光論の形成期における制度化、具体的には研究機関の成立過程とそこでの研究・教育内容に改めて注目した。連邦工科大学への観光研究センター設置構想から、ザンクト・ガレン商科大学観光セミナーでの研究内容にいたるまで、共通して確認できるのは、総じて経済的観点であったが、そこで目指されたのはホテル経営のような特定分野に限定するのではなく、国家介入をはじめとする政治的・社会的変化も認識した研究・教育であった。

1940 年代初頭のフンツィカーとクラブフの観光論を理論面から検討したシュポーデによれ

(44) 1945 年までに刊行されたものは以下の通り。このうち一部の文献は前掲したが、改めて書誌情報を示しておく。W. Hunziker/K. Krapf, *Grundriss der allgemeinen Fremdenverkehrslehre (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 1)*, Zürich 1942; *Verkehr und Tourismus in der Kriegswirtschaft: Referate gehalten anlässlich des ersten Kurses über Fremdenverkehrsfragen des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen am 18. Mai 1942 (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 2)*, St. Gallen 1942; W. Hunziker et al, *Kurort Kurdirektor Verkehrsdirektor: Ein Beitrag zur Institutionenlehre des Fremdenverkehrs und zur Abklärung von Wesen und Funktionen des Fremdenverkehrsortes sowie der Stellung, Aufgaben und Ausbildung seiner Organe (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 3)*, St. Gallen 1943; *Nachkriegsprobleme von Verkehr und Tourismus (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen: 4)*, St. Gallen 1943; W. Hunziker, *System und Hauptprobleme einer wissenschaftlichen Fremdenverkehrslehre (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen, Nr. 5)*, St. Gallen 1943; *Problèmes de l'après-guerre: Rapports présentés au troisième cours consacré à l'étude des questions touristiques par le Séminaire touristique de la Haute école des études économiques et commerciales de St-Gall, les 6 et 7 septembre 1943, à Montreux (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen, Nr. 6)*, Lausanne 1943; *Erholung und Arbeitskraft: Referate gehalten anlässlich des vierten Kurses über Fremdenverkehrsfragen des Seminars für Fremdenverkehr an der Handelshochschule St. Gallen am 29. /30. November 1944 in Baden (Schriftenreihe des Seminars für Fremdenverkehr an der Handels-Hochschule St. Gallen, Nr. 7)*, St. Gallen 1945.

(45) Krapf, “Die Handels-Hochschule St. Gallen als Ausbildungsstätte des Fremdenverkehrs”, S. 83–84.

(46) Ebd., S. 84. レプケとスイス観光論との接点については、拙著『スイス観光業の近現代』、126–129 頁を参照。

ば、フンツィカーの構想した観光論は経験的文化科学としての社会学に属するものであり、むしろ経済的な問題は「科学的観光論」の部分領域を形成しているに過ぎなかった。しかし、戦後にはそのフンツィカー自身が「経済現象の真相を究明」することを「避けられない義務」と述べるようになるのである。⁽⁴⁷⁾確かに、戦後に公表された研究の傾向からしても、スイス観光論の視野は戦後に狭まっていったことは否めないように思われる。他方で、1940年代初頭の観光論が、経済にとどまらず、社会や政治への視野を開いたこともまた事実である。⁽⁴⁸⁾そのことが、戦後の Reka や国際機関を舞台とする実践活動につながっていくことも無視することはできない。今後は、戦後におけるフンツィカーとクラブフによる理論と実践の往還に注目することで、スイス観光論の歴史的意義を再検討していきたい。

付記

本稿は JSPS 科研費 23K11642 による研究成果の一部である。

(47) Spode, “Geburt einer Wissenschaft: zur Professionalisierung der Tourismusforschung”, S. 6–7.

(48) Schumacher, *Ferien*, S. 351. 拙著第 6 章では、1940 年代前半の観光論と Reka に代表されるソーシャル・ツーリズムの実践との関わりを検討している。